

論文の内容の要旨

論文題目 父系血統主義の系譜 - 植民地朝鮮における司法政策の臨界 -

氏名 吉 川 美 華

現代韓国で、父子の生物学的つながりを相互に無二の関係とし父系血統と呼ぶことは、朝鮮時代に由来すると考えられ、1948 年の国籍法や 1960 年の民法はじめ社会の随所で長らく機能してきた。しかし 1894 年の甲午改革では庶孽差別禁止が改革項目に掲げられており、父子が生物学的つながりを有していても、この時まで庶孽は差別されていた。

こうした事実から、本論文では現代韓国の血統概念が、1910 年から 1945 年の日本の植民地統治期における法整備過程に端を発することを仮説とし、どのような経緯で、なぜ父系血統を重視する考えが生まれたのかについて、朝鮮時代から解放後の民法制定までの父子関係の変化を史料に基づいて分析した。

本論文は、父子の生物学的つながりを無二とする考えが植民地期に発生したことを論じるために、概ね韓国併合の前後で二部構成とした。

まず第一部の第 1 章では、植民地朝鮮に導入された血統概念が日本由来であることを明確にするために、維新期以降に血統がどのような文脈で使用されたかを制度整備過程から精査した。

西欧では婚姻関係にある夫婦から誕生した子を同じ血統と考えていた。ところが日本では婚姻関係にない男女の間に誕生した男子も世代承継の対象者に含まれている。そのため、法整備の過程で社会通念に合わせ概念が擦り合わされ、父子の生物学的つながりを父の血統と翻訳した。

さらに日本で父子の血統は、教育勅語を通じて儒教の五倫と結びついた。この過程で徳目における父子の精神性は、生物学的つながりから再解釈され、君臣へ重ねることで天皇を頂点とする家族国家観が造成された。

第2章から第4章では、朝鮮では士大夫だけでなく王位継承でも父との生物学的つながりだけでは、確固な世代承継の根拠とならないことに言及した。朝鮮王朝実録や国制書を史料として、第2章では私領域である世代承継の枠組みから、第3章では科挙受験や及第の要件という公領域の規定から分析した。また、第4章では、王位継承の過程で前王との生物学的つながりがどのように語られ効果をもったのかに言及した。

国制書においては「立後」条は原典において、父子の生物学的つながりを重視すると思わせる条文が存在するが、「奉祀」条とあせてみることで、庶子は世代承継の対象から回避される存在とされる。これは、夫婦が君臣に優先する存在であり、すべての人倫の本となるという思想に基づくものであった。科挙受験や及第については「諸科」や「限品叙用」に庶孽に対する制限が規定されていた。科挙受験に制限があることは、庶子が宗族ネットワークから排除される決定的な理由となった。

第4章では朝鮮時代の王位継承を、嫡長子の継承、廃世子後の再推戴による継承、王崩御後の王妃による推戴での継承、反正による継承に分類し、朝鮮王朝実録の歴代王の推戴理由が記された総序を史料に継承の根拠を明らかにした。

総序に記された継承理由の大部分は、才能や生まれ持った神秘性や気質など王位継承者自身の資質に基づいていたが、英祖、哲宗、高宗の三王の王位継承は孝宗、顯宗、肅宗の三宗との生物学的つながりである「三宗の血脈」に依拠していた。ここではまず、朝鮮時代に父子の生物学的つながりを血脈と呼んでいた事実を明らかにした。英祖の王推戴理由である「三宗の血脈」は、現代韓国では正統性を持つ承継概念と考えられている。しかし「三宗の血脈」は、肅宗時代から続く党争の中で権力争奪を目的に誕生した政治的文脈を持つ概念であり、血脈が王推戴の確固たる根拠とならないことは英祖が最もよく理解していた。

第2部の第5章から第10章では、朝鮮・旧韓国に日本が影響力を及ぼし始めて以降の法整備と政策を分析した。

第5章では、朝鮮民事令に旧慣温存政策が盛り込まれた政治的文脈を分析した。

旧韓国は従前に領有された地域と異なり、独立国家であったことから統治の困難さが懸念され、朝鮮総督の権限強化は不可欠であった。そのため、この地に憲法の適用は避けたいと考え、台湾とは異なり制令第一号の見直し規定を設定しなかった。見直しには日本人と朝鮮人の風俗慣習が同等となる必要があると広く考えられていた。

初代総督の寺内正毅はもともと、植民地朝鮮では内地の法律を用いる方針であり、韓国民法典を準備していた梅謙次郎に対して起草を中断させた。しかし、植民地朝鮮において権限強化を図るには、旧慣温存政策は利用価値が高いと考え、すでに調査が終わっていた慣習を利用し、強化することへ方針を転換したことを寺内の回顧から探った。

第6章では、梅主導の法整備を整理し、慣習調査事業ではどのような視角から行為を慣習と認めたのかを、「慣習調査報告書」と地域慣習調査の記録とのズレから考察した。

梅は、韓国政府法律最高顧問になって以降、国籍に関係なく旧韓国に居住する全員に適用する民法典編纂を主導したが、1909年7月の「韓国司法及監獄事務委託ニ関スル覚書」の締結で、その対象を韓国人のみへ縮小とすることとし、寺内による事業の中断以降は旧慣調査内容を報告書にするにとどまった。

旧慣調査は調査問題の構成から、明治民法の家に基づく家督相続に相応する朝鮮の慣習を調査することに主眼がおかれたと推測される。実地調査が行われたが、行為の根拠を典籍調査によって確認するという方法が取られた。ただ、使用された典籍には偏りがあり、士大夫の暗黙の行為背景となる礼についての理解も不足していた。ただし、この時までに蓄積された慣習や、整理された「慣習調査報告書」は、司法判断や政策策定の場で拘束力を持つこととなった。

第7章では、登録制度の変遷を、民籍法の制定と改正を中心に検討し、慣習の名のもと父系血統概念が導入される過程を明らかにした。

民籍法の立案を担当したのは警察官僚の松井茂であり、目的が治安維持であったため、全住民を登録して特定することに主眼が置かれ、登録は住居と扶養関係に基づき現状を保存する形がとられた。

ところが、1915年の司法部への民籍法の移管により、「慣習」を軸に明治民法の家制度に類する再編が試みられた。この過程で決定権を持ったのが事務官僚の小田幹次郎と司法官僚の立石種一であった。

小田は朝鮮の姓不変の原理に基づき、姓が家の変更や婚姻によって変わらないのは、親子の血統が男親からのみ伝わると認識されているからであり、妾は祭祀後継者を生む必要不可欠な存在であると断定した。父系血統を軸に戸主や家族の民籍外の庶子は届出で父の民籍に登録できるとした。反対に、従前に行われていた被承継者に庶子がいる場合の養子縁組は一切受理せず、間違っても受理しても職権による訂正を可能にした。

第8章では朝鮮時代後期から韓国併合後の裁判での朝鮮の慣習の読み替え過程を分析した。

韓国併合初期に行われていた明成皇后の甥である閔泳翊の後嗣をめぐる三件の養子縁組確認請求の裁判では、「嫡子なき場合に庶子あるも礼料を受けずして養子を為すに妨なきことは庶人

たると宗親国戚たるとを問わず朝鮮一般の慣習なり」と、閔泳翊の庶子の有無に関係なく、当事者不在の宗族による養子縁組が可能であるとの判断が下された。しかしその二年後の家督相続権確認並民籍抹消請求で、庶子がいる場合の養子縁組は「名門勢家各自の一個の専断行為」と判断された。

民籍法の改正ですでに、庶子がいる場合の養子縁組の届出は受理されないため、植民地朝鮮では、庶子がいる場合は被承継者当事者の生前死後の意思や届出に関係なく、養子縁組が例外なく認められない構造が完成した。

第9章では1939年の朝鮮民事令改正で、姓氏概念が血統の有無で擦り合わされる過程に言及した。

民事令における創氏改名は、複数の姓が混在する朝鮮戸籍に称号の氏を付すことであるが、内鮮間には「姓氏」概念にズレがあり、制度施行の過程で「姓は血統の標識、氏は家の称号」のキャッチフレーズで理解が促された。

創氏の届け出は同調圧力によるものも含め、朝鮮の総戸数の八割に達した。名門宗族が同じ氏を届けるパターンも一定程度存在した。これはプロパガンダ効果があるが、総督府が想定する宗族を天皇につなげるという創氏の目的に相反するものであった。

第10章では、大韓民国における民法制定の審議において、植民地朝鮮での旧慣温存政策と皇民化政策が併存する経験が「朝鮮の慣習」をどう認識したかを、日本の教育を受けた植民地エリートであり、民法起草に強い影響を及ぼした身分編の責任委員に張暲根と、朝鮮戦争中に独自で民法を起草した金炳魯、および国会審議を中心に分析した。

民法典に対する構想は、張暲根は日本の戦後民法による家族を、金炳魯は朝鮮時代の醇風美俗を取り戻すことを重視しており立場は正反対であった。しかしともに、1939年の朝鮮民事令改正前の慣習を朝鮮の慣習と、そしてその慣習は父系血統主義を軸にしていると考えていたことで共通していた。また、檀君神話と同姓同本禁婚の矛盾に対する審議からは、父子の生物学的つながりを重視する血統概念がすでに国会審議の参加者にも共有されていた。これまで、儒道会が制度への儒教規範導入を主導したと批判されてきたが、父系血統主義を朝鮮時代に由来すると考えて民法に反映させたのは、植民地期に日本の学知を叩き込まれた植民地エリートであった。

以上から、朝鮮時代の父子の生物学的なつながりは血脈と呼ばれ、父子の血脈が婚姻関係に優先する規範は存在しなかったこと、血統主義の象徴となる庶子がいる場合の養子縁組の禁止は、民籍法の改正とそれに依拠する裁判の判断によって不動となり、旧慣温存政策によって醸造され、民法制定時に朝鮮時代の醇風美俗として導入され、現代に続くが、実はこれは日本発祥の概念であることを明らかにした。